
黒薔薇の魔女と堕ちた大魔導師

紗九

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

黒薔薇の魔女と堕ちた大魔導師

【Nコード】

N2770T

【作者名】

紗九

【あらすじ】

国王夫妻の娘として生まれたにも関わらず、魔導師として生きるしかなかった姫の物語でございます。
初心者でして、あらすじ書けませんでした。すみません。

あるところにととても美しい姉妹のお姫様がいらっしました。

賢く美しい姉姫様。

可憐で快活な妹姫様。

しかし、そのお二人以外にもこの国に姫が居ることはあまり知られておりません。

そのお方は、ある意味ではとても有名でした。

けれども、姫と呼ばれることのないそのお方は、やがて国民から別の名で呼ばれることとなります。

『黒薔薇の魔女』

魔女と呼ばれるこの国の大魔導師は、城から離れた巨大な塔で暮らしています。

緑の蔓が巻き付いた彼の塔の名は『薔薇の塔』。

それは、かつてその塔に住んでいた魔女が、城でローズと名乗ることに由来していました。

現在その塔で暮らしているのは、その魔女とは何の関わりもない国の大魔導師です。

彼女の名はノワール。

魔導師は家を捨てるので、彼女はただのノワールでした。

大魔導師の称号をいただいて城でお勤めをする彼女ですが、城から塔までは馬で4時間、鳥でも30分はかかる距離です。

そんな彼女の元へ届け物を頼まれた兵士が単騎、わざわざ城から4時間の道のりを駆けて来ました。

「ノワール様、お届け物がございます。開けてくださいませ」

休暇を取ったノワールですが、彼女は基本的に城以外の場所へ出かけることはありません。

一人になりたくなった時に休暇をとり、家で休んでいるのです。皆はそれを知っているので、責任ある立場の大魔導師でも簡単に休暇を取ることができていました。

「ノワール様、どうかなさいましたか」

彼にとって、目の前の扉をなかなか開けてもらえないのはいつものことです。

ノワールのために往復8時間の移動を苦も無くやってのける彼は、哀れなことにノワールのことが大好きでした。

しかし、帰りの道もごさいます。

長居は出来ぬので、焦った彼は鍵のついていない扉を勝手に引いてしまいました。

「・・・」

扉を開くとその先は、なんと扉でした。

そこには張り紙が貼ってあります。

『 お客様へ

大変申し訳ございませんが大魔導師ノワールは、ただいま城へ出かけております。

明後日まで戻りませんので、御用の方は後日もう一度ご来訪頂くか、城の魔導研究室までお訪ねください。

ノワール
』

行き違いとなった兵士は見えない程悲嘆に暮れていました。ノワールに会えなかった上に、彼はこれから4時間かけて城まで戻らなければならぬのですから当然でしょう。

扉を閉めた彼は、ノワールに届けるはずだった荷物を改めて馬に
括り付け、颯爽とはとても言えぬ様子で去って行きました。

その頃ノワールは・・・

1 (後書き)

今更なんですが、この回ほとんどいらなかった気がしてならないのです・・・

ノワールは姉姫様の寝室に居りました。

寝室のベッドには、ゆるくウエーブのかかった金色の髪を枕に散らした美しい姫が眠っておられます。

彼女はシェリアンナ姫とおっしゃられ、国民からは姉姫様と呼ばれ慕われていらっやいます。

姉姫と申されましても、彼女は長女ではございませんし、妹様と呼ばれるロザリー様も次女ではございません。

この国の国王の長子であるのは、今は家を捨てた大魔導師ノワールでありました。

「御姉様・・・」

「ロザリー・・・」

ベッドサイドに佇む姉の元へやって来たのは妹姫様でした。

侍女を連れておりましたが、最も大切なものはその手にしっかりと抱きかかえていらっやいます。

「ディオーン、わたくしたちの甥ですわ」

ロザリー様の腕の中の赤子は、先程そこで眠られるシェリアンナ様の御子であられます。

新たな家族の誕生に、姉妹はそろって幸せな空気をかみしめておられました。

2 (後書き)

短い・・・これはちゃんと小説になるのでしょうか？

魔女と申しまして、その姿形はその他の人間となんら変わりはありません。

妹と同じ金色の髪に空色の瞳はこの国でも珍しくもない色です。

彼女が他と異なったのは、その身に宿す魔力の質と量でございました。

それは、お妃様の御身に宿られたその瞬間に、王族であることを捨てねばならぬ程です。

第一子であつたにも関わらず、その誕生は秘密裏に処理され、彼女は国の魔導師の一人に弟子として育てられました。

幸いなことに、陛下は彼女の出生の秘密を公然の秘密とし、御本人も物心ついた頃から自分が王家の姫であつたことを自覚しておられました。

自覚していたからこそ実の両親に継ぐことはせず、国に仕える大魔導師となつたのです。

「ノワール様」

城の一角、正面入り口から左の離れに向かう一本の回廊で彼女は呼び止められました。

「ロザリー様、どうかなされましたか？」

実の姉妹でありながら、人目がある所ではその関係を隠すように敬称を付けて互いを呼び合う姫君たち。

知らぬ者には何気ない日常にも思えますが、知る者にとっては目を逸らしたくなるような光景です。

ぎこちないロザリー様に対し、ノワールはその表情を隠す白き面をその顔にかぶせておりました。

今に始まつたことでもないので誰も咎めはしませんが、彼女は幼き頃からその顔を隠し、髪の色さえ分からぬようにフードをかぶって生活しているのです。

その姿を知る者は多くはありません。

ですが、大魔導師たる力を持つ者はそう居るものではなく、何者かにとって代わられる心配も無用です。

国王陛下がそれでよいと言うのであればそれでよいということでございましょう。

「ご相談したいことがございます・・・」

「かしこまりました。私の研究室でもよろしいですか？」

悲しげなロザリー様の前を歩くノワールの背は、仮面のせいか何の感情も浮かんでおりませんでした。

嘆き悲しむロザリー姫を連れて来た大魔導師に、部下たちは多少混乱の色を見せましたが、ノワールに近い者は落ち着いて対応しているようでした。

王族が暮らす城内にあるとはいえ、魔道研究室などという場所に王族が足を踏み入れることはまずありませんので、この混乱も仕方がございません。

部下に部屋に近づくかぬよう人払いを命じたノワールは、ロザリー様を室内に招き入れ、落ち着くようにと抱きしめました。

既に仮面は床に投げ出され、ノワールは顔を歪めてロザリー様を抱きしめています。

「ロザリー・・・」

「御姉様、わたくし・・・」

仮面で必死に感情を隠してはおりましたが、ノワールは既にロザリー様の悩みの原因を知っていました。

ロザリー様がお声をかけられたのは、先ほど国王からその内容を聞いた帰り道だったのです。

「大丈夫。私が、何とかしてみせるわ・・・」

表では堂々と名を呼ぶことさえかなわない姉妹でしたが、妹であるロザリー様はノワールのことを大変慕っております。

ノワールも妹たちのことはとても可愛がっております。

この国を守るべき国王やそのお妃様、そして妹姫たちを守るため

に、彼女は大魔導師という物騒極まりない称号を受け入れたのですから、今回の事でも当然彼女はその身を犠牲にする覚悟で対応を考えておりました。

文字通り、その身を代わりに据えることで。

3 (後書き)

最早何も言いますまい・・・

国王の娘たちのご生母様であられる王妃様が寛がれる私室に、その日は手紙が届いておりました。

宛名はございませんでしたが、この部屋が国王と王妃の私室である以上、その手紙はそのお二人に向けてのものでございましょう。いぶかしみつつも最初にその封を開けたのは王妃の侍女でした。

中の便箋には『エノヴィアへ』と書かれており、王妃様宛の手紙であることを確認した侍女は、内容に目を通すと慌てて王妃様にその手紙を読むように勧めます。

生家で姉妹の様に育った侍女の、かつてないほどの取り乱しように驚いた王妃様でしたが、手紙の内容を読むにつれてそのお顔からは血の気が引いてしまわれました。

倒れかかる王妃様を他の侍女たちが支え、最初に手紙を読んだ侍女はその手紙を手国王陛下の元へと駆けてゆきます。

何人もの兵や臣がそれを見咎めました。が留まることはありません。後少しというところで兵に止められた侍女でしたが、その手紙を見せると兵たちも急いで侍女を陛下の元へと送り届けました。

「何事だ」

息も乱れた侍女の姿に怒りよりも驚きが勝った陛下は、周囲の者が叱責するよりも先に事の次第を問いかけられました。

陛下もこの侍女が王妃様の生家から連れて来たたった一人の侍女であることを知っていたためでしたが、告げられた内容は王妃様の身に関するものではありません。

「エノヴィア様宛に、ファ、ファキアからの手紙が・・・」

寄越せと言うより先に侍女に手紙を差し出された陛下は周囲の目も声も気にせずその内容に目を通されました。

その顔は王妃様と同じように血の気を失われ、やがて背後の執務机に手を付かねば立っていられない程憔悴されている様子。

「ノワール殿をここへ・・・」

「は、はい」

手紙の内容を知らずとも、大魔導師であるノワールに頼らねばならぬ事態であることは陛下の顔を拝見すれば明白でございます。

文官である臣はすぐさま部屋の外に立つ、ここまで侍女を連れて来た兵にノワールを呼ぶよう言いつけました。

「どうなされたのですか？」

ただ事ではない空気を察知した大魔導師は、陛下に対する礼もそこそこに陛下の元へ駆け寄ります。

そこへ差し出されたのは先ほどの手紙でした。

何を言うでもなく、黙って差し出されたそれを受け取ったノワールも、黙ってそれに目を通します。

「ロザリー様のことでございましょうか」

その声は震えておりました。

周囲の文官たちも、常に感情を感じさせない大魔導師の動揺に驚いておりましたが、名前を出された妹姫様のことが心配でたまりません。

何事かと尋ねたくとも出来ぬ空気がそこにありました。

「どうしたら・・・どうしたらよいのだ」

血がにじむほどに唇をかみしめられた陛下を止める者は、ここにはおりませんでした。

4（後書き）

もう少しまともに文章が書けたら良いのですが。
なかなかむつかしいです・・・

「そんな・・・お考え直してくださいませ、御姉様」

「御姉様がいらつしやらなければこの国は・・・」

国王陛下の私室には、陛下夫妻の他に彼の侍女と娘の姫君二人と姉姫様の夫、そして大魔導師がおりました。

縋る姫たちの前でノワールは首を横に振ります。

「御姉様ならそんなことをしなくても、このような無法者っ」

「この方は先々代の魔導師です。魔の者となられたこの方には、私の力など遠くおよびません」

ファキアという魔の者からの手紙には、王妃によく似たその娘を花嫁として差し出すようにと書かれておりました。

シェリアンナ様には既に夫となられた隣国の元第3皇子であらせられるレガード様がいらつしやいます。

国の跡継ぎとなられるディオン様がお生まれになった今、彼女がその花嫁となる選択肢はございません。

ロザリー様にも政略結婚ではございますが、既に相思相愛の婚約者がいらつしやいます。

刃向うことができない程の力を持つ魔の者が相手では、そうも言っでは居られないのでございますが。

「出家した身ではございますが、私もお母様の娘です。それに、何かあっても私なら生きて帰る可能性がございます」

「ノワール・・・」

涙する王妃様には最も信頼する侍女がその傍らに付いております。陛下はその王妃から離れるとノワールの傍へ行き、その身をしっかりと抱きしめました。

ここまで進んだ政略結婚を今更反故にすることもできませんし、ディオン様の母であるシェリアンナ様を行かせるわけにも参りません。

「私の国と合同でその者を討伐なさっては」

ノワールと血が繋がっているわけでもないのに、レガード様も何とかノワールの意思を曲げようと必死になって下さっているようでした。

「大丈夫ですわ、義兄様。幸い私には想う方もおりません」

全く幸いでもないことを言ったノワールは、本気で妹たちに泣き付かれてしまいました。その決意は揺らぐことはありません。

「それに、やっと私にも王族としての仕事が回ってきたのです。この国は、私の王家の血にかけて必ずや守ってみせます」

その晩以降、黒薔薇の魔女をこの国で見かける者はおりませんでした。

5 (後書き)

一区切り。

終わりじゃないです。

当たり前ですか・・・

黒薔薇の魔女ノワールが国から姿を消して早ひとつきが経ちます。それでも国自体は平和で何の問題も起きてはおりませんでした。もちろん私がノワールに代わりこの国を見守っていることも関係ないわけではございませんが、それ以前にこの国は平和なのでございます。

そこへやって来た悲劇はノワールという存在を犠牲にすることで事なきを得ました。

ですから、誰が何と言おうと今現在のこの国は何の問題もなく平和なのでございます。

国は栄え、隣国との親睦も滞りなく、豊穡に恵まれ、洪水も地震もなければ天から槍が降り注ぐこともなく、ましてや大魔導師が国に害をなすこともございません。

それなのに今、この国の王城からはかつてないほど活気が失われつつありました。

原因は誰しも分かっております。

「御姉様はご無事でしょうか・・・」

「わたくしがここにおりますのは他でもない、ノワールが無事生きていますでございます」

「生きているというだけでは納得できませんわ」

それは暗にノワールの様子を見てくるようにと言っているようなものでしょうが、私にはその命令をきく義務もなければ聞けない理由もありました。

よって、私は妹姫であるロザリー様のお言葉でも聞かなかつたことにして飛び去ることしかできませんでした。

ところ変わって城下町。

町にも大魔導師不在の知らせは届いておりましたが、大した影響はございません。

それはもちろん、私の力もあつてのことですが、やはりそれは元来この町が平和であつたからでしょう。

「生きているか？」

死んでいるかも知れないと思いながら声を掛けると、思いがけず大きな動きで立ち上がられて驚きのけぞる羽目に。

そんな私を慌てて拾い上げると窓枠に戻してくれたのは、ノワールを慕っていた彼の兵士でございます。

生気のない顔で、もしかしたら死んでいるかもなどと思ったのも無理はない姿の彼が、今でもノワールのことを想っていることは明白です。

彼は到底真実を知りえる立場にはありませんが、ノワールが居ないという事実のみでこうまで泣き暮らすことができるようでした。

彼が真実を知ることもないのでしょうか、知ったとしたら身投げか、もしくはその身を挺してノワールを助けようとするのでしょうか。

まあ、只の兵士にできることなど何もないのですが。

「ノワール様は、ノワール様はご無事なのですか!？」

真実を知らない彼は、ノワールが国を離れたということしか知らないでしょうから、余計なことを告げるわけにはまいりません。

「私がここに存在するということはそういうことだ。そんなことより、真面目に働かないとノワールが戻ってきたときには奴の連絡係を下されてしまっていることになるぞ」

それどころか職を失っている可能性もありうるのだが、とりあえ

ずそれを聞いた兵士ははつとして瞳に力を漲らせておりました。

「ですが、ノワール様は本当にお戻りになられるのでしょうか」

嘘をついても構わないのであれば、ここで彼を勇気づける言葉を吐くこともできたでしょう。

ですが私は嘘のつけない正直者です。

何も言う言葉のない私は、黙って彼の眼前から飛び立つことしかできませんでした。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2770t/>

黒薔薇の魔女と堕ちた大魔導師

2011年11月30日19時53分発行